

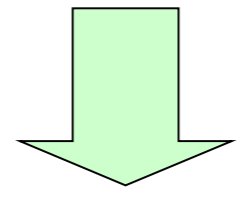
目的

崬径部周囲の痛み(以下、崬径部痛)

- ✓器質的疾患を有する場合が少ない.
- ✓治療に難渋する.
- ✓サッカー選手に多く発症する.
- ✓キック動作と関連が深い.

+

成長期のスポーツ活動は、さまざまな障害が発症し問題となることが多い.



➤サッカー競技における成長期(育成年代:中学生、高校生、大学生) サッカー一部員に対し、崬径部痛の実態を調査した.

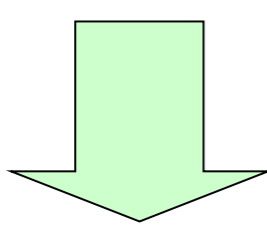
育成年代:財団法人日本サッカー協会において、10歳~20歳までを育成年代としている。
この年代では、技術面等の強化の他、各種のサポートを行っている。

方法

T県及びT県近隣のサッカー一部所属男子学生360名に独自に作成した調査用紙を配布.

(研究に対する説明および個人情報保護に対する誓約を、口頭および書面にて行い、さらに研究に対する同意を書面により得た.)

- ✓内訳:中学校3校, 高校4校, 大学2校
- ✓調査期間:2008年9月~11月
- ✓質問内容:1)身長・体重, 2)競技歴, 3)崬径部痛発症有無, 4)発症時の活動状況, 5)痛みの程度, 6)治療の有無, 7)治癒までの期間



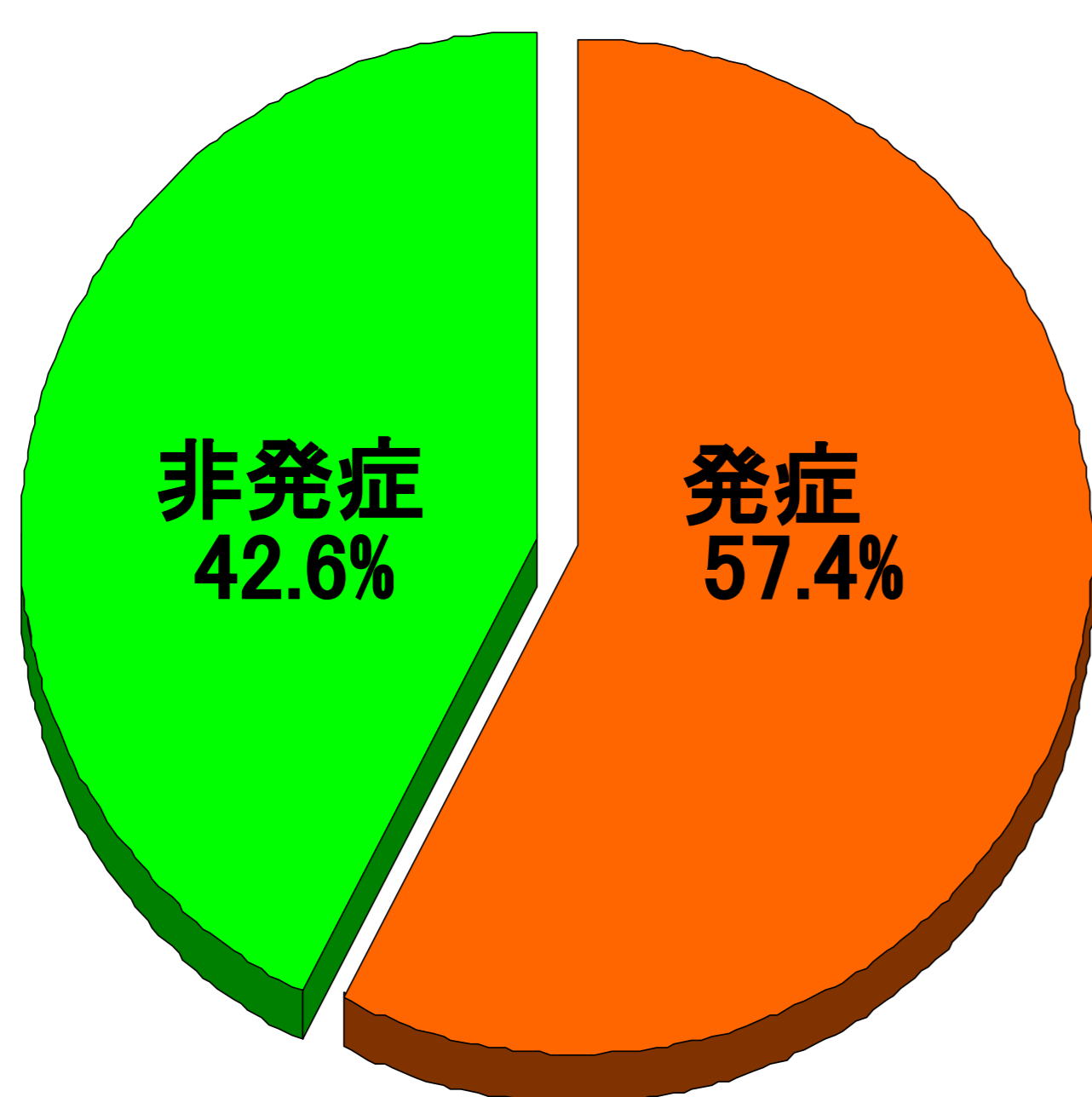
➤319名回答(中学83名, 高校135名, 大学101名)
:回答率88.6%)

結果

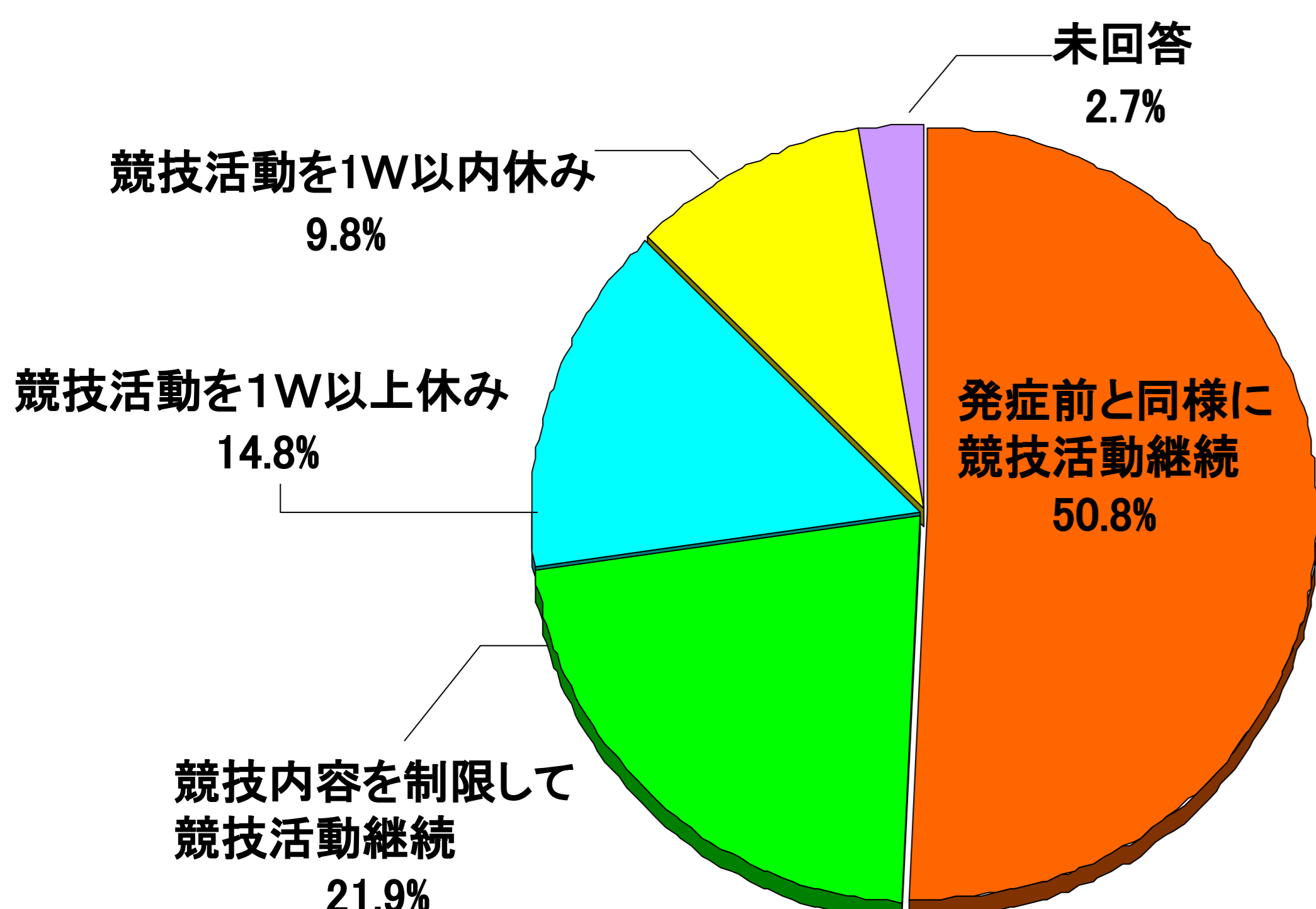
✓回答者情報

	人数	平均年齢(歳)	平均競技歴(年)
中学生	83	13.1±0.7	4.6±2.4
高校生	135	16.4±1.0	7.8±2.4
大学生	101	20.4±1.6	12.5±2.9

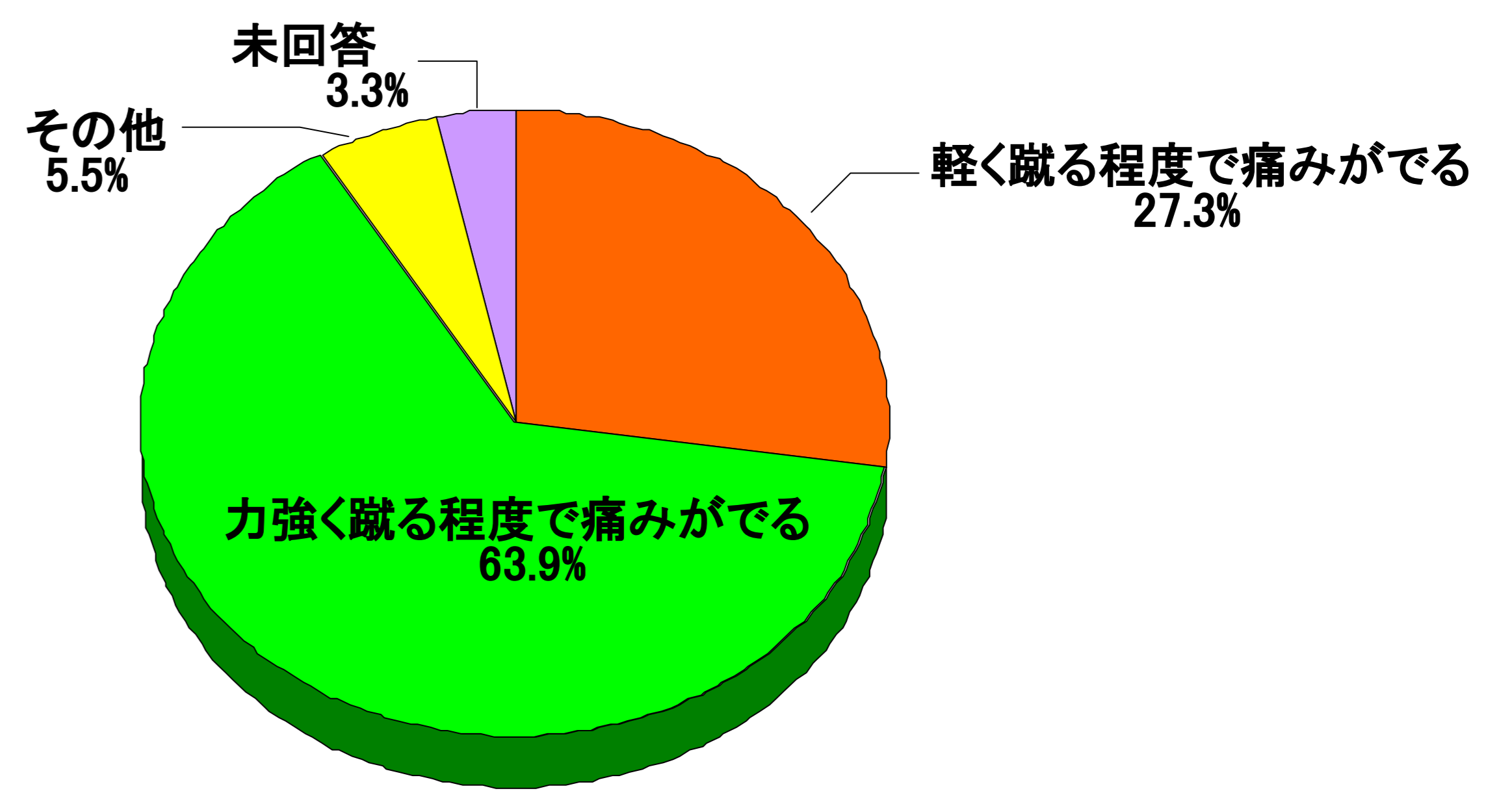
✓発症率



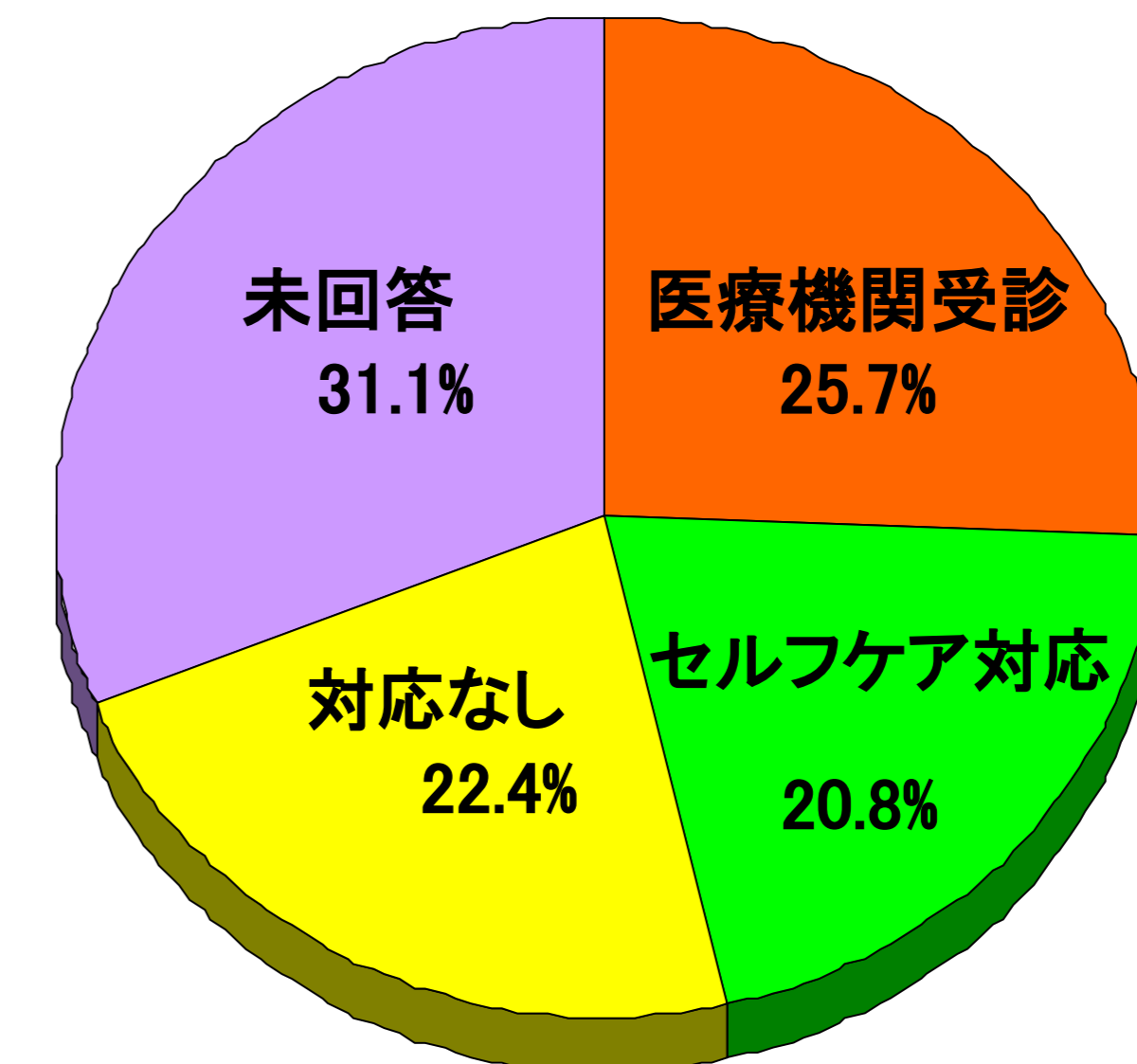
✓発症後の活動状況



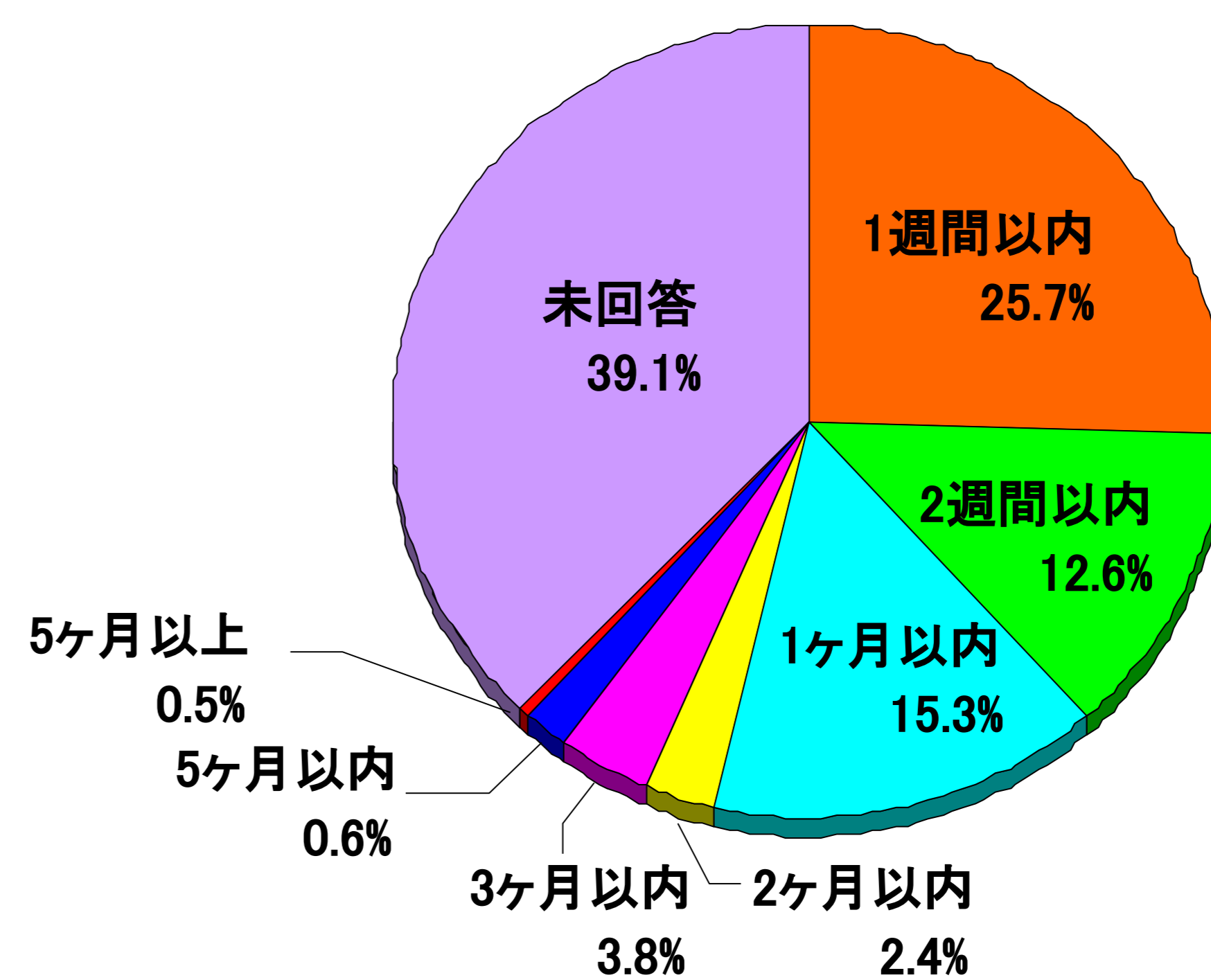
✓痛みが出現するキックの強さ



✓治療の有無



治癒までの期間



考察

➤先行研究では、崬径部痛(崬径ヘルニア, 恥骨結合炎, 恥骨疲労骨折などを含む)の発症率は5~10%と報告されている。

引用: Br J Sports Med. 2004

➤今回の調査で、育成年代(中学生・高校生・大学生)サッカー選手の半数以上が、崬径部痛を発症している。

先行研究での発症率は、医療機関等受診により確認されたものと考えられる。しかし、今回の調査では、フィールドワークにより得られた結果であり、潜在的に崬径部痛を有している選手が多いことがいえる。

➤育成年代での崬径部周囲の痛みを発症後の特徴

- * 医療機関受診率が低い.
 - * 発症前と同様に競技活動を継続
 - * 競技復帰まで短期間
- 重症度は高くない…?

育成年代の特徴

- * 痛みを我慢する傾向
- * 障害に対する知識不足…など

まとめ

今後は、育成年代での特徴を把握し、スポーツにおける傷害の知識の啓蒙や、フィールドで行える対策を講じることで、発症の予防を行うことも重要と考える。

さらに、この時期の選手の身体機能の検証や、サッカーの動作との関連も検証する必要があると考える。

